

D 41 技法からみた越後縮の絣模様
県立新潟女短大 ○山崎光子 長井久美子

目的 越後縮の絣模様はどのような特徴をもっているのだろうか。越後縮生産の最盛期は、江戸中期の安永から天明期ころといわれているが、越後絣の最盛期は、古記録からみてもそれより後の時期となる。越後に遺されている縮裂を貼った見本帳のうち、現存の最も古い安永期のものは大半は格子柄や縞柄であり、つづく天明期の見本帳も琉球絣に近似した特殊なものである。ここでは、その時代以降の多くの越後縮見本帳などから、年代の明記されている資料を中心に、越後絣の特徴を、絣模様のための技法の面から考察する。

方法 資料としては、文化年間年から明治初年にいたる年代の分かる越後縮布見本帳、並びに越後縮奉納幡や奉掛け、また御所廻りの越後縮などを用いた。

結果 江戸後期から明治初期までの越後縮の絣模様の墨付けのために用いた用具は、今日まで伝え遺されている絣定規、すなわち木羽定規・棒定規・溝定規であり、絣模様は、その三種の定規の組み合わせによってつくられている。木羽定規は具象模様を主体とする緯総絣であり、棒定規は単純な模様の経緯の小絣、溝定規は一つの経絣を移動させてパターンをつくる幾何模様である。時代によっての使用定規の頻度の高さや模様の特徴は、それぞれの年代の見本帳からほぼ推測できる。しかし越後の絣の特徴は、木羽定規と溝定規の組み合わせによる模様であろう、奉納幡や御所廻り縮などの精緻な仕事ぶりのなかにそれはみられる。